

飢餓の時代

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

二十世紀、農業分野での技術革新の三本柱は、品種改良、農業、化学肥料だった。気候や害虫の影響を受けやすい農業のリスクを下げ、収穫の安定を図り、作業効率を高めるために米ソ二大国は大規模に計画的・組織的農業を推進した。遺伝子組み替えなどのバイオテクノロジーを開発し、農産物の工業製品化、商業化を徹底的に進めたアメリカが結果的に独り勝ちした。アメリカは完全に資本の原理に忠実に農業政策を推進し、世界の主食たる小麦やトウモロコシなどの飼料作物を作る穀物メジャーがマクドナルドのような食品メジャーと連携するなどして、安値で世界供給を推進し、米国産小麦とトウモロコシへの依存率を高めつつ、種苗市場、農薬市場、肥料市場をも支配する「謀略」を進め、エネルギー供給や軍需産業のみならず、農業でも世界を支配しようとしてきた。その結果、日本は完全にアメリカの食料戦略に組み込まれることになった。この点に関していえば、日本はアメリカに生殺与奪の権をすべて渡したようなものである。

コロナ禍やウクライナ戦争で流通経路に支障が出た影響もあり、食料自給問題は安全保障の最も重要なテーマとなっている。中国は戦争準備の一環としてか、食料の爆買いをしており、そのあおりを受け、日本は最初に飢餓に見舞われるという危機が現実のものになりつつある。実質、日本人の胃袋はアメリカのみならず、仮想敵国の中国にも握られている以上、兵糧攻めに遭う覚悟もしておかなければならない。敵基地攻撃能力よりも食料安定供給のための外交、ミサイルの爆買いよりも食料自給率向上こそが急務なのだが、政府は国民が飢える心配を全くしていないかに見える。

戦前はまだ農業従事者の割合は高かったが、戦後の経済成長は農村人口の減少と農業離脱を促した。アメリカの意向を受け、米食より小麦食を推奨した頃から、食料自給率は低下の一途をたどっていたのである。それこそが安全保障上の最大の懸案だということに為政者はあまりに無自覚だ。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授